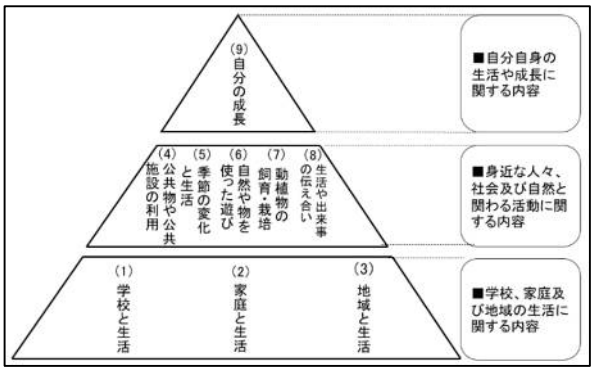
シンポジウム「生活科における飼育活動」

齋藤　博伸

１　生活科の内容

生活科は，具体的な活動や体験を通して学ぶとともに，自分と対象との関わりを重視するという生活科の特質を基に，９つの内容で構成している.生活科の各内容の記述には，次の要素が組み込まれている.第１は，児童が直接関わる学習対象や実際に行われる学習活動等である.これは，具体的な活動や体験は，目標であり，内容であり，方法でもあるという生活科の特質である.第２は「思考力，判断力，表現力等の基礎」，第３は「知識及び技能の基礎」，第４は「学びに向かう力，人間性等」であり，育成を目指す資質･能力の３つの柱である.９つの全ての内容は，これらの４つの要素により構成されている.



低学年の児童に，よき生活者としての資質・能力を育成していくためには，実際に対象に触れ，活動することが欠かせない.そこでは，様々な対象について感じ，考え，行為していくと同時に，その学習活動によって関わる対象や自分自身への気付きが生まれ，それらが相まって学びに向かう力を安定的で持続的な態度として育成し，確かな行動へと結び付いていくことが期待される.

例えば，内容（７）の動植物の飼育栽培では，動植物を飼ったり植物を育てたりする活動を通して，それらの育つ場所，変化や成長の様子に関心をもって働きかけることができ，それらは生命をもっていることや成長していることに気付くとともに，生き物への親しみをもち，大切にしようとする児童の姿を実現していく.

２　学校における動物飼育について

平成元年に新設された生活科では，動植物を飼育・栽培する学習活動が位置付けられ，今次改訂の学習指導要領に引き継がれている.これは，児童の自然離れの現象が年々強まっていることを一つの背景としている.そこで生活科において，動植物を育てて楽しみ自分の生活を充実させていくことが大切なねらいであるとした.また，平成２０年改訂においては，生命の尊さや自然事象について体験的に学習することを重視することから，生活科において，自然に直接触れる体験や動物と植物の双方を自分たちで継続的に育てることを重視するなど，自然の素晴らしさや生命の尊さを実感する指導の充実に配慮することが求められた.

長期にわたる飼育・栽培の過程では，自ら関わって行くことで，児童の感性が揺さぶられるような場面が数多く生まれてくる.しかし，児童を取り巻く自然環境や社会環境の変化によって，日常生活の中での自然や生命との触れ合い，関わり合う機会は乏しくなってきている.このような現状を踏まえ今次改訂でも，生き物への親しみをもち，生命の尊さを実感するために，継続的な飼育・栽培を行うことは大きな意義があることとしている.

また，指導計画の作成と内容の取扱いでは，継続的な飼育･栽培を行うことが特に強調されたのは，平成20年改訂からである.これは，自然現象に接する機会が乏しくなっていることや生命の尊さを実感する体験が少なくなっているという児童の置かれた現状を踏まえたものである.平成２９年改訂におい

ても引き続き充実を図ることが重要であることが示されている.

３　継続的な飼育・栽培について

生活科では，飼育と栽培のどちらか一方のみを行うのではなく，２学年間の見通しをもちながら両方を確実に行っていく.動物を飼うことは,その動物のもつ特徴的な動きや動物の生命に直接触れる体験となる.また,植物を育てることは,植物の日々の成長や変化,実りが児童に生命の営みを実感させる.動物を飼うことも植物を育てることも,継続的に世話をし，繰り返し関わる過程で，生命あるものを大切にする心を育む価値ある体験となり，そのことが生命の尊さを実感することにつながる.

動物や植物への関わり方が深まるような継続的な飼育,栽培を行うとは,一時的・単発的な動植物との関わりにとどまるのではなく,例えば,季節を越えた飼育活動で成長を見守ること，開花や結実までの一連の栽培活動を行うことなどである.そのような活動を通してこそ，動植物どちらの場合も生命の尊さを実感することができると考えられる.児童は，長期にわたる飼育・栽培を行うことで,成長や変化,生命の尊さや育て方など様々なことに気付き，親身になって世話ができるようになる.

４　事例　モルモットを飼育する単元

各学校では,児童の実態,飼育に関する環境,活動のねらい等に応じて,継続的に飼育する動物を選定する.そのため各学校では，どのような動物を飼育するかについては，各学校が地域や児童の実態に応じて適切なものを取り上げることが大切である.飼育する動物としては，身近な環境に生息しているもの，児童が安心して関わることができるもの，えさやりや清掃など児童の手で管理ができるもの，動物の成長の様子や特徴が捉えやすいもの，児童の夢が広がり多様な学習活動が生まれるものなどが考えられる.その際,動物との出会いを工夫することも大切である.例えば,第２学年の生活科で毎年,モルモットを飼育する単元がある場合でも,３年生からモルモットを飼育することを依頼されて引き継ぐ場面を意図的に設定することなどが考えられる.

(1)単元の目標を設定する

モルモットを飼育する単元で育成をめざす資質･能力は,単元の目標で示される.ここでは,次の４つの要素が構造的に組み込まれている.

①児童が直接関わる学習対象や実際に行われる学習活動等
②「知識及び技能の基礎」に関すること
③「思考力，判断力，表現力等の基礎」に関すること
④「学びに向かう力，人間性等」に関すること

このことを踏まえて、各学校では単元の目標を次のように作成することが考えられる。

モルモットを飼育する活動を通して（①),モルモットの変化や成長の様子に関心をもって働きかけ（③),モルモットに合った世話の仕方があることや生命をもっていることや成長していることに気付き（②),モルモットへの親しみをもち，生き物を大切にすることができるようにする（④）.

(2)単元の評価規準を作成する

生活科は，児童が具体的な活動や体験を通して，あるいは前後を含む学習の過程において，文脈に即して学んで行くことから,評価は,活動や体験そのもの，すなわち結果に至るまでの過程を重視して行われる.そのためにも,単元の評価規準及び一連の具体的な学習活動のまとまりである小単元における評価規準を具体的な児童の姿として作成することが大切である.

例えば,第１小単元は,モルモットに関心をもつこと，これまでの動物の飼育体験を生かした様々な視点からモルモットへの気付きを重視しながらも,第２小単元にかけて継続的に評価する計画とする.また，第２小単元では，本単元の中心となるモルモットの飼育活動であり，モルモットへの気付きを高めながら,モルモットに働きかけたり,状況に応じて関わり方や世話の仕方を変えながら飼育を継続したりする姿を評価する計画とする.さらに,モルモットの飼育活動の過程で身に付ける習慣

や技能も評価する計画とする.第３小単元では，上手に世話ができるようになったことへの気付きとともに，これまでのモルモットとの関わりを振り返り，世話をして気付いたことやモルモットへの思い，自分自身の成長を自分なりの方法で表現すること，モルモットへの親しみやこれからも生き物を大切にしようとする態度を評価する計画とする.

(3)資質・能力を評価する

第２小単元におけるモルモットの変化や成長の様子に関心をもって働きかける姿を評価する際には,「モルモットの変化や成長の様子に着目したり，モルモットの立場に立って関わり方を見直したりしながら,世話をしている」などと評価規準を設定し,児童の資質･能力を「思考力,判断力,表現力等の基礎」として評価する.さらに,この「思考力,判断力,表現力等の基礎」を評価できるようにするために，気付いたことを基に考えることができるような多様な学習活動を次のように設定することが考えられる.

小単元名（時数）	学習活動
1 見てさわってなかよし大さくせん(4)	・３年生からモルモット飼育を依頼され、話し合う。 ・獣医師から、モルモットについての話を聞き、気を付けなければならないことを知る。 ・モルモットに触れたり、えさを与えたり、一緒に遊んだりしながら、モルモットを観察する。
2 お世話でなかよし大さくせん(7)	・モルモットの飼育環境やえさ、世話の仕方などを調べる。 ・モルモットの様子に合わせて、世話の仕方を工夫する。 ・モルモットを飼育して、気付いたことを絵や文で表現したり、友達に伝えたりする。
3 ぼく・わ	・これまでのモルモットの飼育活動を振り返る。

・モルモットの食べ具合を見て，えさの種類や量を調節している.
・モルモットの様子を見ながら，嫌がらないようになでたり，抱っこしたりしている.
・モルモットの立場に立って考え，モルモットが気持ちよく過ごせるように世話をしている.
・世話の過程で起きた問題の改善に向けて，世話の仕方を変えている.
・世話の仕方を見直そうとして，獣医師や上級生に聞いたり本で調べたりしている.

このような具体的な児童の姿を想定し,児童の行動を観察したり,発言やモルモット日誌を分析したりする.生活科では，思いや願いの実現に向けて気付いたことを基に考え，気付きを確かなものとしたり，新たな気付きを得たりするため,「見付ける」,「比べる」,「たとえる」,「試す」,「見通す」,「工夫する」などの思考が多様な学習活動の中で働いているかについて評価する.

(4)学習活動を豊かにする

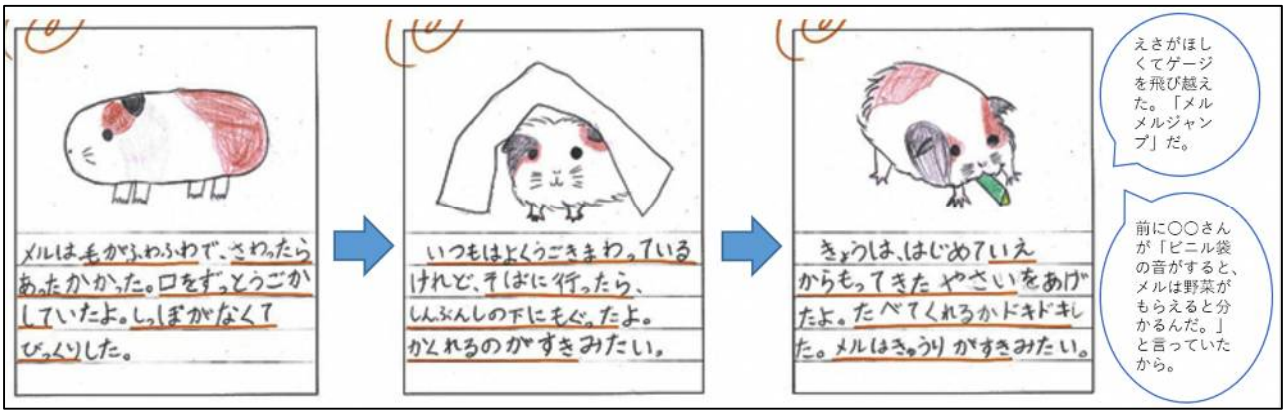
主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善に基づいて，生活科の学習指導は，児童の思いや願いを実現する体験活動を充実させるとともに，表現活動を工夫し，体験活動と表現活動とが豊かに行きつ戻りつする相互作用を意識し進めていく.

単元の評価規準		知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
		モルモットを飼育する活動を通して,モルモットに合った世話の仕方があることや生命をもっていることや成長していることに気付いている.	モルモットを飼育する活動を通して，モルモットの変化や成長の様子に関心をもって働きかけている.	モルモットを飼育する活動を通して，モルモットへの親しみをもち，生き物を大切にしようとしている.
小単元における評価規準	1	①モルモットの特徴，変化や成長の様子に気付いている.		①元気に育てたい，仲良くなりたいという思いや願いをもって，モルモットに関わろうとしている.
	2	②モルモットも自分たちと同じように生命をもっていること,成長すること,モルモットに合った世話の仕方があることに気付いている. ③モルモットを適切な仕方で世話をしている.	①モルモットの変化や成長の様子に着目したり，モルモットの立場に立って関わり方を見直したりしながら，世話をしている.	②モルモットに心を寄せ，モルモットの様子に合わせて，繰り返し関わろうとしている.
	3	④モルモットへの親しみが増し，上手に世話ができるようになったことに気付いている.	②モルモットとの関わりを振り返りながら，世話をして気付いたことやモルモットへの思い，自分自身の成長を表現している.	③モルモットとの関わりが増したことに自信をもち，関わり続けようとしている.

例えば第２小単元では，モルモットの変化や成長の様子から，どのように世話をすればよいのかを考えながら，えさやりや水替え，掃除などの飼育活動を行う.その際，４人程度のグループを編成し,当番を決めて,日常的な飼育活動をしていく.継続的な飼育活動を通して，次第にモルモットにとって適切な飼育環境に気付いたり，自分の世話とモルモットの変化や成長の様子を関連付けたりして，適切に世話をすることができるようになる.

また，継続的な飼育活動の楽しさを味わうとともに，それらを通して気付いたことや楽しかったことなどについて，言葉，絵，動作，劇化などの多様な方法で表現し，考えることができるようにする.その際,児童一人一人が飼育活動を通して気付いたことを，学級全員で共有し，みんなで高めていくことも大切である.例えば,「メルはキュウリが好きみたい」「シロンはリンゴが好きみたい」「ごはんをほしがっているときは立ち上がるよ」「えさは人が離れてから食べるから，こわがっているのかな」など自分が発見したことと友達が発見したことを比べ，似ているところや違うところを見付ける.そうして，「今度はメルやシロンのためにキュウリとリンゴを持ってこよう」「最初は触るのもドキドキしたけど，今は慣れてきてうれしいな」などと,飼育活動において，主体性が発揮されたり自分自身の変化に気付いたりするようになる.

このように継続的な飼育活動を学級全体で伝え合うことは，児童が考えたり感じたりしたことを言語化していく.集団としての学習を高めるだけでなく,児童一人一人の気付きを質的に高めていく.例えば,モルモットを観察しながら,「チモシー（牧草）をたくさん食べるよ.ねこじゃらしみたいな部分が一番好きみたい.小松菜よりもキュウリが好きだよ」「いつもはよく動き回っているけど,そばにいったら,新聞紙の下にもぐったよ.かくれるのが好きみたい」と観察カードに絵と文で気付いたことを記録していく.このように学級全体で伝え合ったことを手掛かりにしながら観察したり，飼育活動したりする姿も期待できる.



(5)動物飼育の配慮事項

生活科における飼育活動を学習活動として位置付けていくためには，管理や繁殖，施設や環境などについて配慮する必要がある.その際,専門的な知識をもった地域の専門家や獣医師などの多くの支援者と連携して，よりよい体験を与える環境を整える必要がある.休日や長期休業中の世話なども組織的に行い,児童や教師,保護者,地域の専門家などによる連携した取組が期待される.また,地域の自然環境や生態系の破壊につながらないように，外来生物等の取扱いには十分配慮しなければならない.活動の前後には,必ず手洗いをする習慣を付け，感染症などの病気の予防に努めることも大切である.児童のアレルギーなどについても，事前に保護者に尋ねるなどして十分な対応を考えておく必要がある.

（文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官）